

アンコール遺跡国際調査団ニュース 第3号

1999年1月23日

1999年1月26日(再加筆)

1. 選挙後のカンボジア新政府の成立について

新政府は1998年10月30日に成立いたしました。新閣僚と新しい人事について、特に調査団と関係のある閣下についてご報告申し上げます。首相は Hun Sen、副首相は Sar Kheng (内務大臣)、同じく副首相 Tol Lah (教育大臣)、上級大臣は Tea Banh (国防大臣)、Sok An (閣僚評議会大臣、調査団と昵懇)、Hor Namhong (外務大臣。もと駐仏大使。調査団と昵懇)、Cham Prasidh (商業大臣)、Buppha Devi (文化芸術大臣。王女様。もとアプサラ・ダンス舞踊家)、Pannara Sirivuth (文化芸術長官留任)、Pen Yet (文化芸術長官再任)、となりました。

その中で、私たち調査団と関係の深い文化芸術省で Chuch Poern 芸大副学長が文化芸術副長官に昇進されました。また、プノンペン大学歴史学部長 Sorn Samnang 先生が農村開発省の副長官に昇進任命されました。お二人にお祝い申し上げます。

Hun Sem 首相には、独立45周年記念(11/6付)および新首相就任のお祝い(12/7付)を差し上げておりましたが、12月25日付で Samdech Hun Sen の書名入りで調査団の18年におよぶ25次の調査に感謝する礼状が届きました。

2. 調査団の人の動き

- (1) 遠藤宣雄氏は、1988年11月3日に(株)東洋エンジニアリングを退職されましたが、1999年2月頃から UNV 専門分野アドバイザーとして2年間シェムリアップ州スラスラン村など7ヶ村に入ります。遠藤氏は、1988年10月18日から26日までシェムリアップのこれから担当する4カ村を訪問しました。その時の報告は以下の通りです。

「カンボジアに出張する前は、現地の UNV 関係者は HSEM と遠藤について色々不安や危惧を持っていたようである。しかし、今回現地に出向いて face to face で話し合ったため、今までの不安や危惧はすべて解消したと全員から言われた。これを聞いて、私が抱いていた不安も解消した。4つの村を訪問し、村人と直接「文化発展」について、一つは「村の伝統文化」を保存すること、もう一つは近くにある「遺跡」について歴史や村との関係を学ぶアイデアを提示したところ、ぜひ実施したいという答えが返ってきた。こういう村人の反応から、私は「文化発展」についての HSEM の考え方が UNV 活動として実施できるとの感触を持った。」

- (2) 調査団では、かねてから懸案となっていましたプノンペン芸大卒業生で引き続き調査団現地調査に参加してくれていた考古学分野の4名と建築分野の3名を研修生として1998年9月から正式に雇い入れました。「カンボジア人によるカンボジア文化遺産の修復」に向けての第一歩となることを願っています。

考古学分野： Chan Kanha、Keo Kinal、Nhim Stheavin、Som Visoth

建築学分野： Chhean Rotha、Mao Sokny、Tat Sunhuot

また、石工職人7名は次のとおりです。出来高払い制です。

Van Narat、So Sem、Prourn Ruos、Uch Chheth、Sngatt Yuon、Suong Touch、Hau Touch

- (3) 高橋宏明氏が、1999年4月から早稲田大学第二文学部の非常勤講師に就任、カンボジア史およびゼミを担当します。同氏は引き続き東京外語大のカンボジア語講師を務めております。
- (4) 笹川秀夫氏は、引き続き東京外語大のカンボジア講師を務めます。
- (5) 文部省留学生 Oum Ravy さんおよび Kk Bunt 君は、大学院修士課程修了見込みです。まだ修論の提出と口述試験がありますので、あくまでも予定です。Oum Ravy さんは大学院博士課程後期課程へ進学しますが、Ek Bunta 君はカンボジア文化芸術省へ帰任いたします。

3. 駐日カンボジア大使の交代について

現在の駐日大使 Truong Mealy 閣下は、2月7日に離任いたし、新駐日大使は In Khiet 前公共土木省大臣(フンシンベック派)と決まりました。In Khiet 大使は、調査団の活動をよく知っており、何かと助かります。

4. 民話プロジェクトがはじまりました

(1) 人員配置と組織図： 民話採集担当スタッフ：丸井雅子

翻訳、編集担当スタッフ：ラオ・キム・リアン

(2)活動内容

(a) シェムリアップ州において民話の採集が可能な地域の調査、選択

- ・ 期間は1998年9月中旬から12月末。活動が本格化するまでは日本人スタッフ1名とクメール人スタッフ1名が担当
- ・ 候補地はパンテアイ・スレイ郡ブラダック村周辺

(b) シェムリアップ州における民話の採集

- ・ 第一段階として実施期間は1999年1月初旬から8月末を予定
- ・ クメール人スタッフを増員した上で採集対象地域にて活動を本格的に開始

(c) 活動の基本的な流れ

- ・ 対象地域への頻繁な出入り。住民となじみながら日頃の情報収集をする
- ・ 集めた情報をもとにインフォーマントを選択し、そこへ通う
- ・ 信頼関係が構築されたところで、民話の採集を開始する
- ・ 採集は基本的に聞き書きとMDによる録音を併用して行う
- ・ 採集した民話は、文書として書き起こす

(3)第二段階以降の活動内容

(a) 第二段階(1999年9月～2000年8月)

- ・ 第一段階の活動内容を継続する
- ・ 採集地域をシェムリアップ以外の州に広げることを検討
- ・ 採集した民話の比較、整理
- ・ クメール人専門家による文書校正作業を開始
- ・ 校正の済んだ文書の翻訳を開始

(b) 第三段階(2000年9月～2001年8月)

- ・ 第二段階の活動内容を継続する。ただし民話採集は半年で終了
- ・ クメール人専門家による文書校正作業を本格化
- ・ 副教材制作のための編集作業開始。2001年8月までに印刷する
- ・ 校正済み文書の翻訳も本格化。編集作業の後に出版、全国の小学校・中学校に配布

5. DO8 建物発掘調査進捗状況ならびに追加発掘調査のおしらせ

上野邦一教授の指導のもとに1988年12月より開始したDO8建物における発掘調査は、分層のチェック、作成図面のインキング等を終了し、1月30日の現地説明会に向け準備を進めているところである。予定では、現地説明会終了後に今次発掘調査を終了し、埋め戻し作業を行う予定であったが、この度の発掘調査を通しての様々な疑問点、推論を再考した結果、今回の発掘区を閉じるにあたり、「DO8建物の当初の地盤高を押さえる」という、ぜひとも確認しなければならない点が浮上した。

12月末の調査では、建物東側正面、高さ1m下がり(開口部踏み石高を0mとし、同高を基準高とする)の地点でラテライト質の層を発掘しており、同ラテライト層を当初の地盤に比定して掘り下げを止めた。しかし、周辺に配されているレンガの施工が非常に粗雑で、同高で行われている舗装作業は二次的な作業のように思われ、かつこのDO8建物より西に60mの距離までの2m毎の高低差を測量した結果、基準高よりも平均して2mほど低いことが判明した。したがって、DO8建物東側正面より環濠までの盛土の深さが、当初の地盤面よりも最深2m近くに達する可能性も想定される。

DO8建物の当初の地盤高を把握することは、他の周辺建物と年代関係を考慮するうえにおいても非常に重要な示唆を与え、かつ今後の予定である環濠内の発掘調査に際しての基準高として、環濠掘削深度の検討、環濠建設に伴う除去土の量の推定など、様々な場面において非常に重要な基準高となる。

上記の理由により、上野邦一先生の指示をあおぎ、今期の発掘調査を終了する前にDO8建物の北東隅区画15m×4m程度を発掘することとしたい。調査期間としては、1月30日の現地説明会終了後、できるだけ早い時期の2月上旬(早ければ2月1日より)開始し、発掘期間は、掘り下げ作業に3～4日、実測作業に3日、予備日として3日間の計10日を考慮している。DO8建物の当初の地盤面確認のための追加発掘調査をお願い申し上げる次第である。

(荒樋久雄氏、シェムリアップ発)

6. パンテアイ・クデイ、DO8建物発掘調査現地説明会

1998年12月はじめより行っているパンテアイ・クデイ、DO8建物での発掘作業に関して、1月15日までに掘り下

げ作業、実測作業等の作業はほぼ終了しました。今後、遺構の分析、出土遺物の整理、図面の清書等の作業を進め、研究成果として発表してゆきたいと思います。

この研究成果は、私たち研究者のみが受益するのではなく、一般の方々へも情報提供を行ってゆければと考えています。

とりわけ遺跡との関わりがもっとも深い近隣の住民に、もっと遺跡への理解を深めてもらい、遺跡の重要性、価値を伝えることは、遺跡を後世に保存してゆくうえで必要不可欠なことと思います。

よって、この発掘調査の機会を利用し、UNVの協力を得て、近隣住民を対象とした現地説明会を開催する予定であります。

現地説明会日時：1999年1月30日

場所：バンテアイ・クデイ遺跡内

対象者：北スラ・スラン、南スラ・スラン、ロハール、クラパンの各村の住民と近隣学校の児童

説明内容：バンテアイ遺跡の歴史、調査団の活動内容、発掘の目的・成果、遺跡保存の重要性

また、UNVとの交渉、現地住民への説明、説明会の準備等は、現地カンボジア人研修生スタッフ主導で行われており、彼ら3人にとっても様々な経験を積むうえでよい機会になることと思います。

(九井雅子氏、シェムリアップ発)

7. JICA作成のアンコール地域5000分の1地図について

「アンコール遺跡を科学する」(1月23日(土))報告会では、JICAのご好意で会場にアンコール地域5000分の1地図を展示いたしますが、じかにご覧いただきたく存じます。その際、もしご希望がありましたら、個人でも購入することができます。アンコール研修所には1セット常備いたします。

8. 朝日サンツアー「第3回アンコール・ワットを科学する旅」について

第3回の「科学する旅」、1999年3月16日(火)から23日(火)までですが、このツアーを石澤・中尾・片桐の3人がお手伝いいたします。ツアー参加者から、アンコール・ワット西参道の石材代を調査団へご寄付いただいております。ご理解とご協力をお願い申し上げます。

9. 文化庁の広報番組「国際協力」(仮称)について

1998年12月、奈文研の杉山洋さんが中心になって文化庁の番組づくりをいたしておりますが、現在放映に向けて編集しています。放映は2月27日(土)午後2時~3時30分、TBS系テレビ。

(奈文研・杉山洋氏)

10. NHKラジオ第一放送「アジア情報」の中でカンボジアの人材養成の件を話します

2月15日(日)午前8時20分頃から5分間、石澤良昭が12月よりはじまったカンボジア人研修生によるバンテアイ・クデイDO8の発掘について、カンボジア人によるカンボジアの文化遺産発掘作業の第一歩ということで、人材養成の観点から報告します。

以上
(文責 石澤良昭)